

*** (仮称) 長崎県の建築史 ***

今年度よりメンバーを新たにしました広報委員会では、「地域により様々な文化をもつ、県内の身近な地域の建築の歴史を知る」ことを目的として、長崎県の建築史を地域ごと（支部ごと）に紐解いていくことにいたしました。世界の建築史や日本の建築史は勉強してきたけれど、地元の建築史はいったいどうなっているのか、「灯台下暗し」の状況を打破して、「灯台足元灯」を灯していきたいと考えています。

取り上げていくのは、有名な建物ではなく「知られていないけど実はすごい建物」にスポットを当て、地元で伝わるお話や、地元建築士のコメントなども掲載していく予定です。私たちだけでは知識不足の部分については、今年9月にまとめられた「長崎県文化財保存活用大綱」の編集に携わられた長崎総合科学大学の山田由香里教授のご指導をいただきながら、楽しく学べるページを作っていきたいと、広報委員会一同はりきっておりますので、何卒よろしくお願い申し上げます。



「世界の長崎に向けて」

山田 由香里

オリンピックが2020年に開かれたなら、6月に長崎、11月に東京で、国際シンポジウム「バチカンと日本100年プロジェクト」が開催されるはずだった。これは日本博の一環で、バチカン文書館所蔵の日本資料を調査する研究者が集まり、最新成果を報告するものである。しかし、コロナの影響で長崎会場は2021年6月12日に延期された（会場：ブリックホール）。

研究者たちは猶予ができた、只今はオンラインで研究会が開かれている。私は長崎の教会堂について話題提供するので、長崎からただ一人加えてもらっている。その結果、研究会の日は、発表者から長崎の名を滝行のように浴びる。それは、16世紀の資料を扱う人でも、20世紀の資料を扱う人でも変わらない。バチカンにはどれだけの長崎が収蔵されているのかと、世界の長崎をずしりと感じる今年である。

一方で、ああバチカンと誰もが共通した景色を思い浮かべるように、ああ長崎と呼べる建築や景観になっているだろうかと思うのである。教会群、洋館、唐寺、石橋、近代化遺産、近世社寺、近代和風、武家屋敷、港町。文化財保護法のもと、百年以上かけて個々の建築の保護は進んできた。しかし、国宝や重要文化財建造物が見やすい姿になっているか、取り囲む景色がふさわしいものになっているか。なにより、街が美しく、楽しく、親しみを感じ、暮らしたいと思える姿になっているか。只今の長崎は、早急に取り組むべきことが少なくないように思う。

本誌で始まる長崎県の建築史に大いに期待したい。個別の建築の紹介はもちろん、周辺における環境づくりの歴史も紹介される。その積み重ねが、「世界の長崎」の建築や景観を育ててくれるのである。